

三宅雪嶺と関西大学

山野博史

はじめに

三宅雪嶺（一八六〇—一九四五。本名は初め雄次郎、のち雄二郎）は、日本近代を同時代として筆一本で生きぬいた在野の言論人である。この国の來し方行く末に深く想いをひそめ、おのれの考えるところを思う存分に書いてうむことを知らなかつた思想界の重鎮なのに、振り返られることも読まれることも少ないまま、今日に到つてゐる。

三宅雪嶺の本領再発見の試み⁽¹⁾がないわけではないが、雪嶺の人と仕事に多年関心を寄せる者のひとりとして、本稿では、三宅雪嶺と関西大学との唯一ともいうべき奇しきえにしについて、点描してみたい。

三宅雪嶺は、大正十年十二月十一日午後二時半から大阪中之島の中央公会堂で開催された関西大学創立三十周年記念講演会に臨み、「外より観たる大阪教育」と題して、自己の所信を披瀝している。このころの雪嶺はといえば、大正九年に住居を東京の赤坂新坂町から代々木平台に移しており、明治四十年一月一日の創刊号以来、自ら主筆を務める「日本及日本人」は、大正十年には通巻八〇〇号を数えていた。

還暦を二年ばかり過ぎたこの言論界の鬱然たる大家を関西大学の講演会に招くのにあずかって力があつたのはだれか。いかなる人の縁で雪嶺は来阪したのか。その人ととのつながりには見るべきものがあるのか。これら

について概観するのが、本稿の主たる眼目である。

一 弁論家としての雪嶺

三宅雪嶺は、一種独特的の弁論家としてつとに声名を集めていた。

天来子（奥付の「著作者」は岩崎勝三郎）著『博士奇行談』（明治35年11月1日・大学館）の「文学博士 三宅雄次郎」の冒頭添え書きはこう記している。比較的はやい時期の評文といえるだろう。

「博士としての博士は、世に定評あるから、茲に抜として、演説家としての彼を評したなれば、先づ訥弁の方である、然し演壇で人に感化を与へる者は、必らずしも雄弁家に限らない、博士は吃々云ふ能はざるか如き言葉の中に、其達識を示し、其氣概を飛す所は、甚だ聞くべき価がある、殊に結末の余音婉々たるなどは、頗る文章の趣きがあつて面白い」（原則として、引用文の漢字は新字体に改めたが、仮名遣いは原文のままとした。以下すべて同じ）

関西大学での記念講演会から四ヵ月ばかりあとに、史



関西大学創立三十五周年記念講演会（壇上は三宅雄二郎）

論家の横山健堂（一八七一—一九四三。本名は達三）が大日本雄辯会発行の雑誌に執筆した伝記「巨人三宅雪嶺」（「現代」第三卷第五号・大正11年5月1日）の末尾近くには、こんな記述がある。

「雪嶺の筆は、その舌の如く、舌は、その筆の如し。敏捷ではないが、真率である。話、その儘、直ちに文章である。筆と舌と、同じやうに、人を引き付ける。聴衆の足を奪ひ、心を奪ひ万事を忘れて、座を去ることを得ざらしむるの慨がある。彼は現代の弁士のうちで、尤も咄^{とつ}且つ吃^{さう}なるものにして、その魅力と勢力から見ると、尤も雄弁なるものである。彼は、初は、筆ばかりであつたが、その舌を以て演壇に立つやうになつてから、筆舌一致して、大なる雪嶺を出現せしめた。

彼は、平凡なる事項、世間の人が、漠然と考へて居て、俄に言ふこと能はざるものを見、取り纏めて、敏捷に言ふのではない。彼の筆と舌とは、人に反省を促がし、考察を促がし、深き感動を与へる。彼が、頭髪、髭ともに疎^{まばゆ}らに、真率の気に充ちた朴訥な容貌、大きな体格、聖者のやうな風采をして、演壇に立ち意氣昂然として来ると

き、右の腕を直角にして、拳を高くさし上げ、思想が胸の中に填充して、茶が一杯に充たされた土瓶から出渢るやうに、言々、咄々として、出渢りつつ、目の輝くとき、彼が雄弁の最高潮に達する、聴衆は彼の博弁、宏辞に醉ふのではないか、その真氣に打たれるのである。彼が沈黙する刹那その顔は森嚴として、敬虔な氣分が漂ふ、一転して笑ひつつ、鄉音を以て、ナイ、ナイ⁽²⁾と言ひながら語るとき、子供のやうに満面に嬉しさを漲^{あふ}ぎらして笑ふ。雄弁の真諦は魅力である。魅力は人格である。雪嶺の立言は、彼の人格である。彼の演説のレコードは則ち彼の文章である」

このわざかふたつの例⁽³⁾をもつてしても、関西大学が三宅雪嶺に記念すべき講演会での登壇を要請したのは、当を得た人選であったといつてよいだろう。それは時代の要請でもあった。

二 待望の記念講演会

大正七年十二月六日、臨時教育会議の答申をうけて、大学令が公布され、「新たに公私立大学、単科大学の設立

を認め、分科大学制を廃して学部制とするなど、大学制度を全面的に改革^①することとなつた。

関西大学（明治三十八年一月、社団法人私立関西大学に改組・改称）もこの機運に乘じ、拡張委員会を設け、大学昇格の体制づくりに着手したが、事は思うように進まず、一時は昇格があやぶまれるほどであつた。この苦境を救つたのが、山岡順太郎（一八六六—一九二六）である。^⑤

山岡順太郎と関西大学とのあいだにゆかしいめぐりあわせがうまれたのは、大正六年から十年まで、関西大学の創立者のひとりである土居通夫（一八三七—一九一七）の後継者として、大阪商業會議所会頭を務めたころからで、大正九年九月、評議員、十年九月、関西大学拡張後援会長の職につき、十一年四月、財團法人関西大学（大正九年三月、改組・改称）理事、同年五月、同総理事に選任され、十二年一月には、第十一代学長に就任している。千里山学舎建設、大学昇格などに貢献大なるものがおり、関西大学中興の祖と称されるゆえんである。大学昇格という焦眉の課題に直面して、山岡順太郎を

はじめとする首脳部の人びとが、創立三十五周年記念祝賀式典を絶好の機会としてとらえ、これを昇格への大切な序曲として活用しないはずがない。

会場は、大正七年秋に創建され、二千名収容可能な大集会場を有し、当時日本最大級の集会専用公会堂として世間の注目の的となつていていた中之島の中央公会堂で、申し分ない。

演壇に迎える講演者をだれにするか。断じてぬかりがあつてはならない。関係者はさぞかし心を碎いたと思われる。

当日の講演は、「物価問題に就て 法学博士 神戸正雄」、「外より觀たる大阪教育 文学博士 三宅雄二郎」、「都市計画談 工学博士 直木倫太郎」の順で進められたもようである。^⑥

三宅雪嶺以外のふたりの講演者の履歴を略述しておこう。

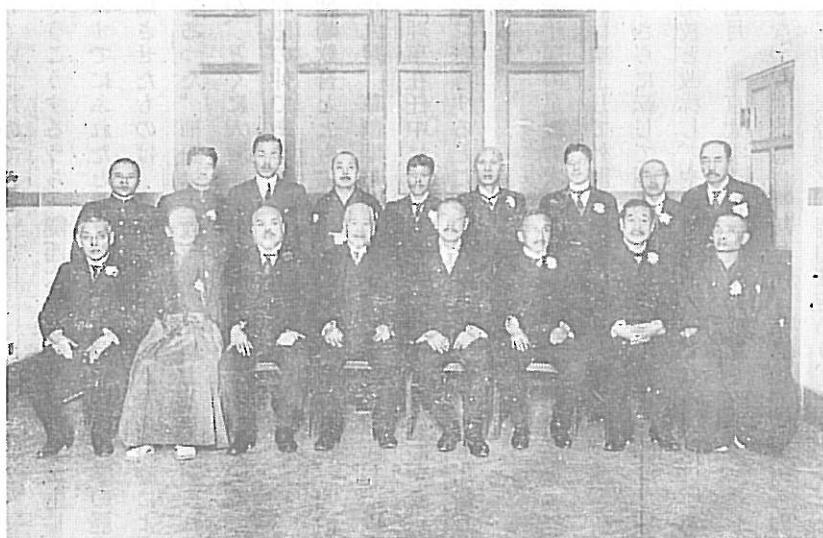
神戸正雄^⑦（一八七七—一九五九）は財政学者。愛知一中、三高、一高を経て、明治三十三年七月、東京帝国大學法科大学政治学科卒業。講演當時、京都帝国大学經濟

学部教授。大正十年四月から十一年四月まで、経済学部長。昭和十二年四月から十九年八月まで、第十四代関西大学学長。

直木倫太郎（りんとうとうら）（一八七六—一九四三）は土木技術者。姫路中学、三高、二高を経て、明治三十二年七月、東京帝國大学工科大学土木工学科卒業。東京市の土木畠の技師等を経て、大正六年一月、大阪市港湾部長、七年九月、兼大阪市市区改正部長、九年一月から十年四月まで、歐米各国へ出張、九年四月から新設の大阪市都市計画部長の職にあつた（大正十二年十一月から昭和十年一月まで第七代大阪市長を務めた閑一は大正三年七月から市長就任まで助役に三選されているから、ほぼその時期と重なる）。

三 交差する人脈

講演会終了後に撮ったと推定される「関西大学創立三十五周年記念写真」が遺っている。前列左から四人目が三宅雄二郎。その右に神戸正雄。雪嶺の左に関西大学拡張後援会長山岡順太郎。雪嶺の右二人目が理事（大正十



関西大学創立三十五周年記念写真

年十二月二十一日辞任)で記念講演会司会者の砂川雄峻

かづたか

(一八六〇一一九三三)。その右が専務理事で記念式委員長の柿崎欽吾（一八六三一九二四）。これらの人びとの経歴をたどつてゆくと、思いがけない雪嶺人脈が浮びあがつてくるのに注意しなければならない。

山岡順太郎は加賀藩の下級武士の長男として生まれている。明治二十年代後半、二歳年長の同郷人、中橋徳五郎(一八六四一九三四)の知遇を得てから、山岡の人生に陽があたり始める。

「当時、同郷の先輩に中橋徳五郎という人物があつた。

中橋の影の形に添うがごとき存在となつた。明治三十一年六月、限板連立内閣が成立し、当時鉄道局長であつた中橋は遞信省を辞任し、同年七月、迎えられて大阪商船の社長となつた。中橋に従つて山岡も官界を去り、大阪商船の文書課長となつた。爾來十数年、彼は中橋を助けて、大阪商船の隆盛の基礎を築くのである。後年の実業家としての山岡の才腕は、商船畑において鍛えられ、成

熟していつたのである」^{〔1〕}

そうこうするうち、関西大学との結びつきが生じたことはすでにふれたとおりだが、「山岡を関西大学の經營に出馬させたものは、当時の理事柿崎欽吾の斡旋によるものであつた。柿崎は大阪有数の弁護士として知られていたが、とくに大阪商船の顧問として、中橋や山岡とは年來昵懇の仲であつた」^{〔2〕}

柿崎欽吾とともに想起されねばならぬのは、明治二十三年九月、草創期の関西法律学校講師に着任して以来、主席理事在任中に病歿するまで四十年余にわたり、関西大学に寄与するところすこぶる大きかつた砂川雄峻の存在である。

姫路藩の足輕の次男だが、「雄峻十四歳の明治五年春、かれは東上して外国语学校に入り、転じて英語学校に入り、さらに転じて開成学校に移つた。この開成学校は大學南校と改称し、やがて東京大学となる。彼は明治十五年七月、東京大学法科を優等の成績をもつて卒業し法學士となつた。同窓に高田早苗、市島謙吉、山田一郎、山田喜三助、天野為之、岡山兼吉あり、これに砂川を加え

て七人組という。彼らは在学中より小野梓を中心として

毎週一回の時事討論の会を結んで、これを鷗渡会となづけた。ときあたかも有名な北海道官有物払い下げ事件で大隈重信の挂冠下野するや、大隈の羽翼をなす小野梓も辞職。新卒業の七人の侍たちが大隈、小野の東京専門学校（早稲田大学の前身）の創立を援け、最初の講師陣を形成したことは早稲田の学史に詳しい。砂川は、早稲田大学にとつても、また忘れ得ぬ人なのであつた」^{〔12〕}

東京での弁護士稼業が意のままにならなかつた砂川は、明治十六年秋、大阪に下り、この地で弁護士を開業する。

「明治の末年から大正にかけて、関大の運営がこの砂川と柿崎の手で操縦されたことはよく人の知るところであるが、砂川と柿崎は弁護士界の双璧として、よく対比されたものであった。大正三年六月二十日付『法律世界』にいわく、「柿崎は円転玲瓏、軽俊温厚の長者なり……砂川は氣魄壯宕、叩けば憂として響く」と。叩けば“カツ”とひびくというのは、かれの名の雄峻（カツタカ）をもじつたものであろう。対照的なこの二人の弁護士が唇歯

輔車よく関大の進路を誤らなかつたのである」^{〔13〕}

明治三十四年八月から三十八年七月まで、第二代大阪市長を務めた鶴原定吉（一八五七—一九一四）の横顔を紹介する明治三十四年八月九日（金）付「大阪朝日新聞」一面掲載記事を略記しておくのもむだではあるまい。

「鶴原氏閥歴 前項大阪市長たることを承諾せし氏は旧福岡藩典医鶴原道室氏の息、安政三年十二月福岡に生る幼にして両親を喪ひ明治七年初て東京に出で開成学校に入り後東京大学に移り文科大学中政治学科及理財学科を専攻し十六年七月卒業文學士の学位を受く、積積八束、三宅雄二郎、坪内雄藏、石黒五十二等諸氏及び当地の砂川雄峻、平賀義美、福井彦次郎諸氏は同窓の友なり、（後略）」^{〔14〕}

四 雪嶺自身の回想

三宅雪嶺は、加賀藩儒医で、藩の家老本多家に仕え、立軒と号した三宅恒の二男（実際は三男だが、長男雄太郎が夭折したため）である。

明治九年九月、東京開成学校予科を経て、十二年九月、

東京大学に入学、十六年七月、東京大学文学部哲学科を卒業している。

雪嶺は、上京に先立ち、明治四年夏、金沢の仏語学校に入り、同年冬、英語学校に転じ、明治八年二月、学制改革により、名古屋の官立愛知英語学校に移っている。最上級に岐阜県出身の坪内雄蔵（一八五九—一九三五。逍遙）がおり、雪嶺は次の級に入つたが、明治九年九月、坪内は東京開成学校普通科に入学しているから、両者はここでも一緒に学ぶこととなつた。この間の事情は、雪嶺の「自分を語る」（朝日文庫）8・昭和25年1月30日・朝日新聞社）の「自分の最旧学友」（我観）大正14年2月）の章に詳しい。

明治十六年七月、坪内は東京大学文学部政治理財学科を卒業、十六年九月、東京専門学校講師の職についているが、その折の同志のひとりが、さきに引用したように、砂川雄峻であつたことを記憶しておきたい。

「自分を語る」の「自分の寄宿生活」（我観）大正14年3月）の章では、東京開成学校の寄宿舎生活についてこんなふうに述懐している。

「（前略）鶴原定吉、穂積八束氏等と同室の事もあり、有賀長雄氏と同室の事もあつた。鶴原氏は年長でもあり、通人もあり、才智あつて軽薄でなく、室内で秀でたが、教場で秀でなかつた。穂積氏や、有賀氏や、議論して別段の事なく、寧ろ早く行詰り、室内で秀でぬけれど、教場で秀で、特に試験に秀でた」¹⁵

雪嶺歿後一年足らずで刊行された「大学今昔譚」（昭和21年11月10日・我観社）に収める「自伝」（「雪嶺自伝」と題して「婦人之友」昭和11年1月～12月連載）の「戦役が終へてから」の章では、日露戦争後の自己の足跡を回顧しているが、こんな叙述が眼にとまる。

「（前略）郷里の友人中戸水寛人が同じく本多の家中であり、河波の塾¹⁶の同門であり、後に、東京大学で寄宿を同じくした。自分より二年後に卒業し、大学の教授となるが、その折の同志のひとりが、さきに引用したように、立、政友会の候補者と争ふことになつた。時に中橋徳五郎が自分の宅に来たり、戸水を助けようでないか、一緒に行かうといふので、金沢へ出かけた。相手の方では

会場を借り切り、演説する場所がないので、兼六公園に急に足場を作り、そこで公開演説したので人気が立ち、大多数で当選した。

やはり本多の家中で桜井一久は司法省法学校を卒業し、神戸で判事職を勤め、弁護士となり、戸水を応援に金沢へ出張し、神戸の有志から立候補を望まれ、『立たうと思ふが、強ひて頼まない』と返答し、自分に応援演説してくれといふことで、出掛けて行つたが、当人自らの演説は頗る妙であつた。自身の政治に関する意見を陳べた後、これには三宅君のやうなのを選出せねばならぬといひ、自身のことをいはなかつた。それでも大多数で当選した。

ところがその後、戸水は先きに政友会の候補と争つたに関らず、自ら政友会に入り、前の同情者を失望させた。桜井が国民党に属し、戸水の態度を非難したとかで、戸水が神戸に出掛けて散々に桜井を攻撃した。戸水としてはさういふことを為すべきでなく、随分乱暴な次第ながら、学者肌で世間を単純にみるといへばいふべく、学者だけに確かな分別があるものと思つた人にとって、一向

に合点の行かぬことをした。

桜井は間もなく急病で歿したが、中橋が新たに金沢で候補に立ち、戸水と両立し難くなつた。戸水は郡部に移つて当選したけれど、前にあまり評判が高かつただけ、みじめな状態になつた。郷里でも、大学でも、中橋と同学で、切つても切れぬ友人であり、時に競争者であつたが、金沢の選挙区を奪はれたので、これといふのも中橋に金があるからのこと、金を作らねばならぬとて、如何はしい会社に関係して問題を起し、遂に政界から退くばかりでなく、世間からも遠ざかつた。

この三人が手を携へたならば、可なりに力を伸し得たらうと思はれるのに、はなれぐになつた。中橋は後に重きを政友会にななし、相当の位置を得たものゝ、十分に満足するを得なかつたらう。（中略）

選挙関係でなく、講演で種々の地方に出掛けたが、大阪朝日新聞社の催して叡山に開かれたが如き、場所が場所として面白かつた。⁽¹⁾

藝州宮島に開かれたこともある。さういふ聴衆に聴かして何かの利益があつたかどうか、疑はしい限りながら、

応援演説か、学術講演か何かで予期しない旅行をしたことがある／＼ある。しかし、選挙では戸水と桜井と中橋との関係を思ひ出し、はかないものとせぬにかけぬ。桜井は自分より二歳の年長、戸水と中橋とは一歳の年少、いづれも過去の人となつた。その相互の関係が何とかなりさうに思つたとても、そこは人間のことで仕方がないか」

中橋徳五郎⁽¹⁸⁾は、加賀藩士斎藤宗一の五男で、中橋ヨシの養嗣子。明治十四年七月、石川県中学師範学校文科卒業。十五年九月、東京大学法学部選科入学、十九年七月、同卒業。十九年十月、大学院入学、商法を専攻する。

明治十九年十一月、判事試補、横浜始審裁判所詰となり、以後、農商務省、内閣法制局、遞信省の參事官などを歴任し、二十四年八月、遞信書記官（大臣官房財務課長兼務）の椅子に着くが、山岡順太郎と中橋とのつながりが太くなるのがこのあたりであるのは、これまたさきに引用したとおりである。

明治三十一年七月、中橋は鉄道局長の職を最後に官界を去り、大正三年十一月まで、大阪商船会社社長として、

日清戦争後の産業興隆の反動で経営危機に陥っていた同社の社運恢復に盡力する。

明治四十五年五月から大正元年十二月まで（大阪から選出）、そして大正五年十一月から十三年一月まで（石川から選出）、衆議院議員。大正七年九月二十九日から十一月六日十二日まで（原敬へ大正十年十一月四日死去）内閣・高橋是清内閣、文部大臣。昭和二年四月から四年七月まで（田中義一内閣）、商工大臣、三年二月から九年三月まで、衆議院議員、六年十二月から七年三月まで（犬養毅内閣）、内務大臣を歴任している。

中橋徳五郎は文部大臣在任中、大学昇格問題ほか、旧弊を打破する施策に手柄をあげたが、現に、大正十二年二月発行の「大學令ニ拠ル関西大學學則」の巻頭に掲載されている認可書の写しには、「文部省大專六号 財團法人関西大學 大正十年二月五日付申請関西大學ヲ大學令ニ依リ設立スルノ件認可ス 大正十一年六月五日 文部大臣 中橋徳五郎（印）」の文字を見ることができる。

おわりに

いつだれがどのようにして三宅雪嶺に講演依頼を申し出たのか。なんの証拠も遺っていない。雪嶺の旅程も不明である。何泊の予定であつたのか、どこに宿泊したのか。

いまとなつては知る由もない。しかし、三宅雪嶺の側が快諾してもふしきはなく、関西大学の側が懇請して困惑の種が生ずるはずもない絶妙の人脈と環境がおのずと用意されていたことだけはまちがいなさそうである。

生まれ在所が同じで、出身学校に重なりがあり、年齢が近ければ、往時のこのえもいわれぬ人間関係のあやからすればなおさらのこと、これら有縁の人士は進んでうちとけようとしたのではないだろうか。それらすべてが一致していなくとも、どれかひとつにでも共通点がありさえすれば、たがいに親近感を抱いたのではないだろうか。

創立三十五周年の佳き日を祝い、大学昇格を切望する発展期の関西大学にとって、大願成就を叶えるために支えあう役者が、学の内外に、揃っていたのである。式典のあとさき、三宅雪嶺を囲んで、山岡順太郎や砂川雄峻

は平素にもまして談論風発に興じたのではないかと想像するだけでも心躍りをおぼえるのは、私ひとりのみではあるまい。

三宅雪嶺の講演「外より観たる大阪教育」の内容については、要約紹介したことがあるが、参考のため、その全文二種を付録として併載しておきたい。

三宅雪嶺主筆、政教社発行「日本及日本人」第八二七号（大正11年1月15日）掲載文（目次のみならず、表紙左端に縦書でこの記事の表題と雪嶺の氏名が印刷されている）。

関西大学学友会雑誌「関西論叢 創立三十五周年記念号」第八卷第一号（大正11年2月7日・非売品）掲載速記録。

練達の記者の手になり、雪嶺みずから眼を通したと思われる前者のほうが、善本といわざるをえないだろう。

注

（1）平成十四年五月二十三日に開館式を迎えた流通経

済大学（茨城県龍ヶ崎市平畑二二〇）の「三宅雪嶺記念資料館」の設置をあげるにとどめる。雪嶺の嫡孫で流通経済大学名譽教授の三宅立雄が、雪嶺の遺品や著述に関する諸資料の公開陳列により、雪嶺にたいする理解や研究が進展することを念願して寄贈した逸品からなる。展示案内パンフレットが作製されており、開館式当日の様子に関しては、学報「R&U Today（流通経済大学報）」（同大学企画調整室発行・非売品）通巻七十五号（平成14年9月30日）参照。

（4）『近代日本総合年表第四版』（平成13年11月26日・岩波書店）二三七頁。
4月15日・言海書房の著書もある丸山幹治（一八八〇—一九五五）と推定される）、五斗兵衛「大愚三宅雪嶺」（大正5年7月13日・武藝社）の「（一五）雪嶺の演説」、「（七五）棚おろし演説」なども参考。

（5）『関西大学百年史 人物編』（昭和61年11月4日・非売品）二四七頁—二五五頁（蘭田香融執筆）参照。

山岡には、鹿子木彦三郎『山岡順太郎伝』（昭和4年11月26日・非売品）がある。

（6）『関西大学百年史 通史編 上巻』（昭和61年11月4日・非売品）三六七頁—三六八頁（熊博毅執筆）。

（7）前掲、『関西大学百年史 人物編』二七四頁—二七九頁（横田健一執筆）参照。

（8）秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』（平成14年5月20日・東京大学出版会）三六〇頁参照。

（9）前掲、『関西大学百年史 人物編』一三八頁—一四二頁（横田健一執筆）参照。

（10）同前、二四九頁。

は内容から見て、のちに『黒頭巾を脱ぐ』（昭和10年

- (11) 同前、二五二頁。
- (12) 同前、一三二頁—一三三頁（菌田香融執筆）。
- (13) 同前、一三五頁—一三六頁（菌田香融執筆）。
- (14) 関西大学年史資料編集室編集発行「関西大学年史紀要」第五号（昭和59年3月）所収「新聞資料集成関西法律学校」一一八頁—一九頁。
- (15) 三宅雪嶺は、「同時代史」第三巻（昭和25年12月20日・岩波書店）一七五頁—一七七頁において、明治三十二年春、日本銀行総裁にたいして理事等が反抗するという紛争が起つた際、外交官から日銀理事に転身し、この一件の中心人物として事態の解決に努力した鶴原定吉の奮闘ぶりに筆を染めている。
- (16) 雪嶺は慶應二（一八六六）年七歳のとき、河波有道（櫻園）に四書五經の素読をうけ、傍ら地理数学習字を勉強し、皇朝史略を学んでいる。『明治文学全集33 三宅雪嶺集』（昭和42年3月10日・筑摩書房）巻末年譜（雪嶺の長男勤夫人、三宅美代子編）四三一頁参照。
- (17) 大阪朝日新聞社主催叡山大講演会（明治40年8月1日—17日）における講演記録（8月11、13、14日講演）に「山上の連想」がある。『叡山講演集』（明治40年11月10日・大阪朝日新聞社）七七七頁—八〇〇頁所収。雪嶺の講演を収録する共著には、これ以外に明治期に限つてみても、『最新思潮講話』（宇宙観）（1頁—56頁）。明治41年6月25日・隆文館）、『六大先哲』（中江藤樹先生に就て）（64頁—84頁）。明治42年9月15日・弘道館）、『諸名家の孔子観』（日本に於ける孔子教）（113頁—126頁）。明治43年4月19日・博文館）、『以正会講演集』（読書の中毒）（16頁—26頁）。明治43年4月22日・南陽堂）、『人格本位と教義本位 文学博士 三宅雄二郎君 日蓮主義と国士大僧正 本多日生師』（二段組全33頁。雪嶺の講演錄（1頁—6頁）。明治44年4月1日・統一団）など、多種多様だが、単行本としては、『壇上より国民へ』（大正4年11月3日・金尾文淵堂）が生涯唯一の講演録といえる。本書は明治三十九年五月から大正四年十月十二日までの日付のある講演・演説集。凡例（森田義郎識す）に「本書は三宅雪嶺博士の講演及

演説を集録したものである。多くは編者の筆記したものであるが、中にはさうでなくて既に丁西倫理講演集、哲学雑誌、道等に公にせられたものもある。博士の校閲を経たものと然らざるものとがある。博士は演説の筆記はともすれば誤りを伝へる虞があるので、公にすることを好まないのであるが之れを編輯し敢て公けにする所以は世道人心に裨補すること少なからずと信じてから的事である。

既に時日を経過して居る問題もあり、誤記誤伝等があつても、それは一に編輯者たる予の責任である」

(口絵に講演中の雪嶺のモノクロ写真一葉を收める)

(18) 前掲、秦郁彦編著三七四頁参照。中橋の伝記に、

中橋徳五郎翁伝記編纂会、牧野良三編輯発行「中橋徳五郎」上下(昭和19年3月25日、同年12月25日・非売品)がある。上巻巻末「中橋徳五郎翁年譜」(全十二頁)も参照。

(19) 関西大学年史編纂委員会企画・編集『関西大学115年のあゆみ』(平成13年11月4日)二十二頁参照。山

岡順太郎総理事が実現した企画に、「学の実化」講座の開催がある。大学昇格直前の大正十一年五月二十七日から(第一回は駐日フランス大使ポール・クローデル「フランス語について」)昭和二年十一月十一日まで、三十三回にわたる。中橋徳五郎は前文部大臣として大正十二年六月五日(第十五回。大学昇格一周年当日)に「教育制度と其の運用」と題して講演している。前掲、『関西大学百年史 通史編 上巻』四一〇頁—四一二頁参照(熊博毅執筆)。

(20) 拙稿「古人の声に耳を澄ます」。関西大学広報委員会編集発行「関西大学通信」第三〇〇号(平成14年6月14日)一面掲載。

(やまの・ひろし 関西大学法学部教授)

「日本及日本人」第八二七号（大正十一年一月十五日）

外より觀たる大阪教育

三 宅 雄二郎

（關西大學三十五年記念講演會に於て）

本日は關西大學創立三十五年記念日であります。三十五年と申せば創立が明治十九年、十九年は當大阪が高等教育に最も冷淡な態度を示した年であります。

之に就てはもつと前に溯つて申さねばなりません。明治維新當時、皇室の下、公卿と薩長土肥等が新しく政府を造りました時、此の大坂に最も希望を囑したのでありますて、之を都とすべきであると云ふのであります。時の有力者なる大久保利通が建議して居り、一般にそれが宜からうと云ふ事になりました。京都は狭くて仕方がなく、東京は——其頃東京と云ひませぬが——江戸は戦争の巷になる、西郷が馳せ向つて之を焼き捨くるとのこと、勿論かたなしになるべきであつて、都は大阪であるとしたのであります。所が後になつて江戸は案外無事である、

江戸を焼きまくらうと云うて東海道を下つた西郷は勝、山岡等と話合の上、之を焼かず無事にすることになり、江戸が無事と云ふことになれば何うも江戸の方が好ささうであり、直ぐ向ふへ都を遷さうと云ふやうになつた。

若し其の當時大阪が今日の勢であつたならば、都を此處に定めると云ふ運動があつたと思ひます、運動しなくても時の政府が此處へ遷さうとしたのですが、大阪で運動せぬばかりでなく、都にされでは困ると云ふのです、將軍が大阪から京都に行つて戦争が起り、引續いて浪人共があちらこちらから集り、太政官とか何とかいひ、何時何う云ふ喧嘩が起るかも知れない、都などは眞平御免を被るとして、如何にも都にすることが嫌さうであつて、何うもそれでは仕方がない、幸に江戸が無事であり、其處に行かうとなつて、之を東京とすることになりました。

然しそれでもまだ大阪に未練を残して居る、大阪には力がある。新政府の基礎を作つたところは大阪である、何うしても大阪を頼みにせねばならぬと云ふので、色々都らしい設備に着手し、造幣局も其の一つである。此處では教育の事を申すのであります、教育に於いて時の

政府が此の大坂に重きを置いて居り、明治五年新に學制を發布した時、佛蘭西になぞらへて、全國を八大學區に別け次で改めて七大學區にしましたが、孰れも大阪を大學區の中心にし、京都を之に附屬させました。東京を始め七ヶ所に英語學校を設け、此の大坂の英語學校からは此處におゐてになります砂川雄峻さんが大學で法學を修められ、文の方で有賀長雄君、理の方で田中正平君と云ふ人々が出られたのである。其の順序で押して行けば大坂は大學の中心地を形作りますが其頃の文部省の經費と云ふものが甚だ少く、特に西南戰役で事が難しく、二百萬圓でやつてくれと云ふ位になり、それでは何うとも仕方がなく、七大學區は全く沙汰罷みになり、英語學校も廢した。それでも東京に並ぶ大阪に何か置かなければならぬと云ふので、舊英語學校を専門學校とした、それも何うも永續させず、大阪に高等の學校なく、明治十九年に至つたのであります。

御承知の通り十九年には帝國大學令高等中學校令など色々出ました。高等中學校は後の高等學校であつて、之を設置する場所を何う決めたかと申すと、文部省では何

處でも宜い、文部で規定したやうな煉瓦造を建てゝ吳れゝば其處に定めると云ふのである。全國で五個の高等中學校が出來ましたが、一は京都であつて、大阪は構はぬ。前の七大學區制で、京都が大阪に附屬したが、茲に大阪が京都に附屬することになった。今ならばさう云ふ高等中學の一つ二つは何でもなく、三つ四つでも出来るが、其の頃は此の一つさへ無駄である、學校ならば京都でするが宜い、大阪では眞平御免との調子である。其後高等中學の關係で、明治三十年京都に帝國大學が設けられたが、此の時も大阪人は冷淡であり、まるで構はぬ。今ならば大阪は黙つて居らず、京都よりも設備を良くしませうが、其頃はさうでない。文部で或は大學科を大阪に設けてはと云ふやうな意見がありましたが大阪はさう云ふ無駄なものを作るに及ばぬ、學校なんかは何處でも好い折角學校を設けて良い卒業生を出して呉れゝば大阪で金を出して之を雇つてやる、大阪は他の地方の役に立つ者を養ふやうな、さう云ふ學校を置くに及ばぬ、無駄なものが町を歩いて居ると目觸りになる、全く書生風な者は居らぬ方が好いと云ふので、何と云つても學校の事

を云ふと耳を傾けやうとせぬ。

明治十九年に初めて文部省で競争的に學校の指定地を定めたのであつて、其の時大阪は極めて冷淡であり、其後引續いて學校は總て京都の方へ譲ることになつたのであります。處が其の十九年に關西大學が種を蒔いた、それが芽を出し少し宛伸びる、伸び方が甚だ遅い、遅いけれども確かに伸びて居る、大阪の教育思想は之と似てゐる。

明治維新當時から明治十九年迄は大阪は商人の町であり、商業も金儲け一方、金さへ出來れば何でもないと云ふことで通して來たのである。其の十九年には高等教育に就いてまるで構はず、何か言つても耳を塞いで居る、耳を開けて居つても平氣であり、耳看板である。それが其の時から少し宛芽を生やすと云ふやうな事が見えて來た、極めて冷淡と云ふ所で芽を出して來たのである、段々と伸びて來て十年二十年三十年、此處で三十五年記念式を催すと云ふことになると、大阪人の頭が以前と餘程の變りであり、今から前を考へるとくだらぬことをして居つたと思ふことが少くなからうと思ふのであります。大

阪の爲めのみでなく、全國から考へても、もつと早くより此邊に眼があいたならば何れ程地理上の形勢が違つて居りませうか。今東京が帝都であり、最早や動かぬやうであります。が、實は東京が帝都たるべきものか、大阪が帝都たるべきものか。偶然の出來事であつても、日本に臺灣が加はり、朝鮮が加はり、滿洲も關係があり、支那も關係があると云ふ所から見れば、大阪の方が何うであつたらうかと云ふ考へが浮びます。今では何うしても變る事が出來ぬ、大阪で百億の金が出ると云ふ位になれば變りませうが、もうさう云ふ必要がなく、さう云ふことをしなくとも、東京は東京で澤山であり、大阪は大阪でなすべきことがある。大阪人のやうに頭が出來て居たならば、都の位置と云ふやうなことを問題にするに及ばぬ。私立でも帝國大學の程度になさうと思へば出來ると云ふ位になつて居る。唯此の先力が伸びるにしましても、今之所は未だ伸び方が甚だ遅く、僅か宛伸びて居るので、之が堅固なのでありませうが、茲が隨分妙な所である。是れと云ふのも東京では初等中等を別として高等教育は東京民の爲めと云ふことを考へず、教育の爲めと云ふ

ことを考へる、初めから東京府に需要があるか何うか、さう云ふことを構はぬ、いきなり法律の科を置き理學の科を置き、文學の科を置き、此等の科を置くの理由は學問と云ふものが斯う云ふものであると云ふに出でゝ居る。東京の高等教育は東京人の望みで出來たのでなく、中央政府で造つて呉れたのであつて色々大きな學校が出来ても、東京の學校としてゞなく、日本の學校としてゞある。大阪はさうでなく、初めこそ大阪は町人の大阪であり、餘計な書生なんか養はなくとも宜いと云ふのであります。段々其の町人の頭が鍛えられたが上、諸方から頭の出來た者を雇ひ入れ、隨分如何はしい者が雇はれた跡形もありますが、年數がたち、事業が進むに従ひ、良いのが集つて來、雇はなくとも良い人が好んで集つて來ると云ふことになり、餘程前と變はり、學校の事も隨分解かり、世界の教育に通ずるものあります。が、それでも學校を造らうとせぬ、何故ならば大阪の知識程度が高くなる時それ相應な學校を設ける、他から何とも言はれなくとも設けるけれど、必要のないのに設けるに及ばぬと云ふのである。決して教育に冷淡なのでなく、大阪

の知識程度に相應した學校ならば、何時でも設けるのであつて、既に醫學の必要があり、醫科大學も出來たほどで、必要なものは、幾らでも設けるが、日本の爲め、世界の爲めの學術と云ふやうな事は、東京か何處か外でやつて貰ひ度いと云ふのである。五十年間で大阪人が次第に頭が良くなり、だん／＼よくなつて、今日は全國で有數或は世界で競ふと云ふくらゐまでになつても、單に文化の爲めと云ふ事は御免を蒙ると云ふのであつて、そこは矢張り算盤ではじき出すのでありませうが、政府で出来るならばやつて貰ひたい、同じ金を使ふなら、もつと有效な方法で使ひたいと云ふので、何うもこの盛んな大阪の割りに教育が盛んでない。初等中等は盛んであつても、高等教育は盛んでなく、盛んであると見えても何うも實は盛んでない、其の證據には茲に唯一の私立大學たる關西大學が、東京に幾つもある私立大學と等しくらゐなものであり、それも餘り大きな顔が出來さうもない、東京の大きな私立大學は政府の力を借らず、隨分政府にいちめられたのであつて、兎も角もあれ迄に發達して居り、大阪の方はそれ程いちめられずに發達が遲いとは何

うといふ事ですか。

此の點になつて來ると斯う云ふ事が一つあります、政府で望む時に民衆の方に用意がなく、民衆で望む頃に政府で用意をして居らぬのであつて、之が始終面倒の起る基となつて居る。初め政府で計畫し着手する時、何うも一般民衆が冷淡であつて、これだけならば宜しからうとして小さな規模にし、人民が幼稚で困ると言ひますが、之で宜しいと思うて居ると、少し宛民力が高まり、何時の間にか意外に漲つて居り、前に計畫した所が役に立たぬばかりか邪魔になつたりする。明治維新以來、政府で計畫したことは大部分さうなつて居り、初めは民衆の方で乘氣にならず、いらぬものに思ひ、それで政府の方で規模を小さくしますが、後になつて民力の方が高まつて來て政府の計畫のやうな狭いものではいかぬ、もつと大きくなくてはと、大きくしようとしても政府で何うも大きくなる事が出來ぬ、これが面倒の起る所以である。本年鐵道創設五十年記念式を催されました、鐵道が五十年間に六千哩に延びたのは餘程の里程であつても、初め三咲六时で百三十哩かける方が四咲八时で百哩かける

よりも有利であると、これでとう／＼六千哩押し通した、押し通して見ると今日の所では汽車が狹くてガタガタ動いて仕方がない、物を運ぶにも同じ石炭高で運び方が少い、戦争があると馬を横に並べる事が出来ず、隨分困つて居る。若し初め日本帝國の將來は斯うである、英國の植民地とは違ふ、軌道を廣くしてやれと云ふ所に見當をつけたならば、最初事が難しくても後に大いに役に立つのである。其の當時はこれで澤山であるとし、其の儘にして居るが爲めに、民力の次第に高まつて來た時に應ずることが出來ず、其の儘で年數が経る程難しく、今は鐵道改築に何億とかけねばならぬ。一切の事がさうであつて、市區改正も其例に漏れぬ。

教育も又之と同じく、初め明治十九年大學令を出した時、全國に帝國大學と云ふものを一ヶ所にした、森文相は名文相と云はれた人であります、其の名文相が折角大學令を作る時、全國一ヶ所、高等中學五ヶ所と云ふ風に決め、其の時はそれで澤山のやうに見えたのである。併し十年二十年経つて見ると何うとも仕様がなく、仕やうがないのも考へて見れば當り前の事で、全國に義務教

育を課して居り、生れた者は誰でも學齡に達し、教育を受けなければならず、相應の年數を經れば、中學が足らなくなり、高等中學が足らなくなり、延いて大學も足らなくなると云ふことになるのであります。初め造る時、眞逆さうまで國力が進むとは思はず、進んでも餘程先きの事とする。何でも自分の手でなければ事が出來ぬと云ふやうに民衆を輕く見て居り、其民衆が何程の事が出來るかと思うて居る中、年數がたつと共に意外に力を現し來り、何處の學校でも志望者が増加し、高等中學の後身なる高等學校で千人募れば一萬以上も集り、十分一及第して落第した多數が何うして居るかと云ふ問題が起つて來ても、まだ政府の方で之に應じて設備を整へようとせず、色々な調査會を設けて取調べると云ふ間に何年も経過し、終に近年急に學校を増設すると云ふことになると、そこで昇格問題と云ふものが起つて來た。學校を造るはよいが造ると反対が起る、造らずに居つても反対が起る、文部大臣甚だ當惑して居る。是は全體に知識の進んで來た結果であります。若し私立でも官立と同等になると云ふ風になれば、前と餘程變つた關係になるやうになると

前には私立で官立同様になると云ふを夢にも考へず私立は幾多教員の内職所、さうして民間の不平連を養ふ所であると思はれ、それで隨分いぢめられたのであります。但し國力の増進するに伴ひ、官立でやり切れぬ、何でも學校がなくてはならぬ、初めは、政府で建物さへ揃へれば、何時でも學校が出來さうに思うて居たのであります。但し後になつて見ると案外さういかぬ、適當の教員がないので困る。私立學校でも相應に教員を養つて居り、他にも色々な事があり、私立學校も必要であると云ふ事に気がつき、漸く私立學校も官立同様になり得ると云ふことを考へついた。初め私立では出來ぬと思つたことも出来ると認めねばならぬ、終に大學令の下、官公私の區別なく、相當の設備あるものは許すと云ふことになつたのであります。そして、私立大學が幾つも帝國大學同様に大學令で認められて居る。關西大學もさうなるわけであつて、さうなる日が遠くないと思はますが、遠くないに決つて居る」とし、官立と同じになりさへすれば宜いかと云ふと大いなる疑問がある。

一應は官立帝大と同等になると云ふ必要があります

けれど、一度同程度になつた時は文部省の定めた學制に據らず、もう一層進まねばならぬ。帝國大學令と云ふものは隨分妙なものであつて、あゝ云ふもので最高教育と云ふことが云へるか何うか。實は高等教育の問題は日本のみの問題でなく、世界の問題である。今日の高等教育と云ふものは眞に高等教育の價値があるか、何年か定つた期間を或る建物の中に費せばそれで高等教育を受けたと云ふことになる、何年か或建物に這入つて居れば何う云ふ利益を得て來るか、何か頭へ入れて來る、色々なことを記憶して來る、其の記憶して居ることが何になるか、記憶して居るならばまだ宜く、試験が済めば大抵忘れる、試験が済んでも覚えて居る、卒業するまで覚えて居るとし、卒業して一年たつとどうであるか、五六六年たつて前の學科の話をされると一向分らぬ、普通學は平方立方と云ふ所も忘れてしまひ、それ以上のに入つた事は薩張り分らない。それも必ず記憶せねばならぬと云ふことならば仕方ありませぬが、何う云ふ場合に必要があるか。外に新に記憶すべき事が澤山にある、次から次と國內の問題、世界の問題と色々それを覚えるのに何うして前の事

を覚える事が出來るか、大抵の古い分は頭から出してしまつて新しいものを入れなければならぬ。或る建物に何年かを費すと云ふのは中世期頃の教育法であり、寺子屋の如くにしてそこで坊主が教へた頃の遣り方である。今やうに印刷物が自由であり、通信が自由であり、電信、電話、様々の設備があると云ふ時代に、矢張り中世期の如く或る建物の中で人を容れ一定の年數を費すと云ふことは時代錯誤も甚しい。此處で世界の教育に大いなる變化を及ぼさねばならぬのであります。これは何十年と云ふことで出来るものでなく、何百年もかかるかも知れず、急に行かぬ、まだ今の處或る建物の中で或る年數を費さなければならぬ、まるで費さぬよりは費す方がよい。さう何でも物は次から次と役に立つものでなく、何う云ふ良い食物を食つてもそれが悉く栄養分とならぬ、或る物は滓がある。教育でも矢張り滓があるのであつて、唯だ滓が多過ぎるのを遺憾とする。

關西大學は大阪の必要、或ひは關西地方の必要を認め出来上り發達するものであるらしい、今日の所、法律、經濟、商業と云ふことになつて居りますのは印度大阪人

の必要を満す爲めであるらしい、それは結構であつて、算盤に合はぬことをしては永續させぬ。併し今の大坂人は豫想よりも進んで居る。人の頭の中の事は窺ふことが出来ませぬが、運動するだけでも感心である。銀行會社員は運動なんかするものでないと思はれたのに、前垂れ掛けて居た者が此の頃は慥に紳士の模範を示す、銀行會社員が紳士の生活をして居り、容貌を見ても隨分よく、如何にも運動場で鍛へ上げたやうな顔つきの者もある。中にはさうでないのもあります、眞に頭と共に身體を養ふと云ふことを實行して居る。其の身體を鍛練すると云ふことがやさしさうで却々難しく、それを大阪では成し遂げて居る。銀行會社員の運動が旺んであつて、それ程身體を鍛練して居り、其の頭には必ず精神が鍛練して居りさうである。あれ程立派な身體には今の如く法律經濟商業と云ふ位で満足が出来るとは考へられませぬ。それも結構なものであり必要なものありますが、頭は此の位のものではなく、もう少し何とか頭相應に出來さうである。上から作つて呉れる教育、是迄の官設の帝國大學と云ふやうなものは、他の地方でも出来る、外から頭

を拵へて呉れゝば宜い。大阪は之れと違ひ、外から拵へて呉れるのを頼まず、自分で身體の力を伸ばすと共に、精神の力を伸ばし、段々と伸ばして最上に達しようとするやうに思はれる。それは何時かさうなるに決つて居り、捨てゝ置いても百年二百年すればなるのであります。さう長い間かゝると云ふことは大阪人の面目でなく、もう少し何とか出來さうなものである。隨分近頃住宅とか土地とかを提供する人があつて、それも好いことであります、序に今一層教育の方へ力を入れゝば何う云ふものでありますか。大阪は進んだと云うても唯一の私立大學が東京で三番以下になり、或は更に下の方へ行くかも知れぬ。之を東京の主な私立大學にする位の事はさう難しくなく、今日決める事も出來さうに思はれるが、そこはまだ明治維新から五十餘年経たゞけであつて餘り頭が進んで居らぬと云ふことになりませうか。併し算盤をばちくにしましても、もう大抵思ひ切つて好ささうなもの、政府で大阪に望んだ所のものは大阪で好まず、其の儘に捨てゝしまつて、或は後に後悔した人もあるやうであります、今程力が進んで参れば後悔しなくとも何時でも

出来ると云ふ心得がありさうに思はれ、それが事實になる事が遠くなく、直ぐ出來さうに思はれるが何うでありますか。學校當事者は隨分御心配のやうであります、が、是は大阪を見くびつての考へであつて、眞の大阪を理解すればチツトも御心配に及ばぬことゝ思ひますが、大阪の中に居る人の分る事であり、外から見たものに分らぬ、外から見たものは見當違をしても幾らか容されることゝ存じます。若し見當違ひなことがありましたならば外から見たので容してやると云ふやうに願つて置きます。

（大正十年十二月十一日大阪中央公會堂に於て）

外より觀たる大阪教育

文學博士 三宅 雄二郎

本日は關西大學創立三十五年記念日でありまして、三十五年と申せば、創立が十九年、明治十九年は當大阪が高等教育に最も冷淡な態度を示した年であります。之れに就てはもつと前に溯上つて申さねばなりません、明治維新當時皇室の本公卿と薩長土肥等が新しく政府を造りました時、此の大坂に最も希望を囑したものであります。之れを都とすべきであると云ふのでありますて、時の有力者大久保利通が建議して居られます。それは大抵好いと云ふ意見であります、京都は狭くて仕方がない、東京は——其の頃東京と云ひませぬが江戸は政争の巷になります、西郷翁は馳せ向つて之れを焼くとのこと、勿論形になります、都は大阪であるといたのですが、後になつて江戸は案外無事である、江戸を焼きまくらうと云

うて東海道を下つた西郷翁は勝、山岡等と詰合の上、之れを焼かぬ、無事にすると云ふことになつた、江戸は無事と云ふことになれば、何うも江戸の方が好きさうである、直ぐ向ふへ都を遷さうと云うやうなことになつた、若し其當時大阪が今日の勢であつたならば都を此處に決めると云ふ運動があつたものと思ひます、運動しなくても時の政府は此處へ建てやうと云ふのである處が運動せぬばかりでなく、都にされでは困る將軍が大阪に入るそれに就て浪人共があちらこちらから集つて来る、何う云ふ喧嘩が起るかも知れない、都などは真平御免である、如何にも都にすることが嫌さうなのであつた、何うもそれでは仕方がない、一層の事江戸に行かうとなつて、之を東京とすることになりましたが、それでもまだ大阪に未練を残して居る、大阪は力がある、新政府の基礎を作つたところは大阪である、どうしても大阪を賴みにせねばならぬと云ふ處で色々の設備がある、造幣局も其一つである、併し此處では教育の事を申すのでありますするが、教育に於て時の政府は此大阪に重きを置いたものである、明治五年新に學制を發布した時全國を佛蘭西に擬つ

て、八大の學區に別け、次で之れを改めて七大學にした、七大學の時大阪を一大學にするのである、それで一大學に英語學校を設けた、東京を始め七ヶ所設けたのであります。英語學校からは此處においてになります砂川雄峻さんが大學の方へ出られまして文の方で故有賀君、理の方で田中正平君と云ふ人々も大阪から出られたのである。其學校は大學として先づ準備に英語學校を設けた、其學校から出られたのである。其順序で押して行けば大阪は大學の中心地である、が其頃の文部省の經費と云ふものが甚だ少い、中にも西南戰爭で事が難しい、二百萬圓であつてくれと云ふ位になつて居る、それでは何うとも仕方がない此七大學は全く止めてしまつた、英語學校も廢した、併し大阪にもまだ何か置かなければならぬと云ふので、之れを専門學校とした、それも何うも永續させぬ、遂に大阪は高等の學校を設けると云ふ處でないと云ふことになつて明治十九年に至つたのであります。御承知の通り十九年には帝國大學令、其他高等中學校令と色々出ました。高等中學校は後の高等學校である。之れを何う決めたかと申すると、文部省では何でも好い、文

部で決めたやうな煉瓦造を建てゝ吳れゝば其處で當てる、五つの高等學校を設けるのである、全國で初めて煉瓦造を建築した處で定めると云ふので五つ出來ましたが一は京都になつて居る、大阪は構はぬ、今ならばさう云ふ高等中學の一つ二つは何でもない、三つ四つでも出来る、其頃は此一つさへ贅澤である、京都でするが宜い、大阪では眞つ平である、で其後高等中學の關係で明治三十年京都に帝國大學が設けられた。此の時も大阪人は冷淡である、今ならば大阪は黙つて居らぬ、京都よりも設備を良くする、何でも出来る、此方で設けると云ふやうな意見がありました。大阪はさう云ふ無駄なものを作りに及ばぬ、何處でも好い、學校を設けて宜い、卒業生を出して呉れゝば大阪で金を出して之を雇つてやる、大阪には他の地方の役に立つ者を養ふやうなさう云ふ學校を置くに及ばぬ、無駄なものは町を歩いて居ると目觸りになる、まるで書生風な者は居らぬ方が好いと云ふので何と云つても學校の事を云ふと耳を傾けぬ、明治十九年に初めて文部省で競爭的に學校の指定地を定めたのである、其時大阪は極めて冷淡である、其後引續いて學校は

總て京都の方へ譲ると云ふことになつたのであります。

處が其の十九年に關西大學が種を蒔いた、それが芽を出し少し宛伸びる、伸び方が甚だ遅い、遅いけれども確かに伸びて居る、大阪の教育思想は之と似て居る、明治維新當時から明治十九年迄は大阪は商人の町である、商業も金儲け一方、金さへ出来れば何でもよいと云ふことで通して來たのである。其十九年には高等教育に就てはまるで構はぬ、何か云つてもまるで耳を塞いで居る。耳を開けて居つても平氣である、それが其時から少し宛、芽を生やすと云ふやうな事が見えて來た、極めて冷淡と云ふ所で芽を出して來たのである、段々と伸びて來て三十年三十年、此處で三十五年記念式を催すと云ふことになると、大阪人の頭が以前と餘程の變りである、今から前を考へるとくだらぬことをして居つたと思ふことが少くなからうと思ふのであります。大阪の爲めのみでなく全國から考へてももつと早くより此邊に眼があいたならば何れ程地理上の形勢が違つて居りませうか。今東京が帝都である、最早動かぬと云ふやうであります。實は東京が帝都たるべきものか、大阪が帝都たるべきもの

か偶然ではあつても日本に臺灣が加はり朝鮮が加はつた、滿洲も關係がある、支那に關係があると云ふ所から見ると大阪の方が何うであつたらうかと云ふ考へて今では何うしても變へる事が出來ぬ、それでも大阪で百億の金が出ると云ふ位になれば變りませうが、もうさう云ふ必要はない、さう云ふことをしなくとも東京で、澤山である、大阪は大阪で爲すべきことがある、大阪人のやうに頭が出來て居つたならば都の位置と云ふやうなことを問題にするに及ばぬ、私立で帝國大學の程度にすれば私立でも出來ると云ふ位になつて居る、唯此の先力が伸びるのにしましても今の所はまだ伸び方が甚だ遅い僅か伸びて居るので之れが堅固なのでありませうが、處が隨分妙な所である、是れと云ふのも東京では教育は初等中等は別として、高等教育は東京民の爲めと云ふことを考へぬ、教育の爲めと云ふことを考へる、初めから東京府に需要があるか何うかさう云ふことは構はぬ、初めて法律科を置き、理學の科を置き文學の科を置き法律の科を置くと云ふ理由はそれは構はぬ、學問と云ふものは斯う云ふものであると云ふ事を明らかにする、東京の教育は

自分の望みで出来たのではない、上から造つて呉れた色々な大きな学校が出来たので、大阪はさうでなく初めこそ大阪は町人の大阪である、餘計な書生なんか養はなくとも宜いと云ふのでありましたがだんく其町人の頭が鍛へられ、其方から頭の出来た者を傭うて来る、隨分如何はしい者が傭はれたやうな跡形もありますが、之れも年數が経つと段々良いのが集つて来る、良い人も好んで大阪へ集つて來ると云ふことになつて御覽、金さへあれば學校は何でも出来ると云ふのであります、それでも學校を造らうとせぬ、何故ならば大阪の智識程度が高くなつた時、それ相應な學校を設けるそれは自分が他から何も言はれなくとも設ける、併し必要のないのに他の地方の爲めに學校を設けると云ふやうな時は大阪の智識程度に相應した高等教育の機關を設ける、大阪には醫學が必要である、醫科大學も出来るやうになる、其外に必要なものを設ける、併し日本の爲め、世界の爲めの學術と云ふやうなものは東京か何處か外でやつて貰ひたい。五十年間でも大阪人が次第に頭が良くなり、だんくよくなつて、今日は全國で有數、或は世界で競ふと云ふ位まで

になつても世界の爲めと云ふ事は御免を蒙る、そこは矢張り算盤ではじき出すと云ふこともまんざらせぬでもないが政府で出來るならばやつて貰ひたい、同じ金を使ふならもつと有効な方法で使ひたいと云ふので何うもこの盛んな大阪の割りに、教育が盛んではない、初等中等は盛んであつても高等教育は盛んではない、盛んであると見えても何うも實は盛んでない、其證據には茲に唯一の私立大學たる關西大學が東京の幾つもある私立大學と等しい位なものである、それも餘り大きな顔が出来ぬ、東京の方は政府の力を借らず隨分政府にいちめられたものである、大阪の方はそれ程いちめられずに又發達が遅い此の點になつて來ると斯う云ふことが一つあります。政府で望む時に民衆の方に用意がない、民衆で望む頃に政府で用意をして居らぬ、之れが始終面倒の起る基となつて居る、初め政府で計畫し着手する時何うも一般民衆が冷淡である、これだけならば宜しからうとして小さな規模にするけれどもそれで宜いと思うて居ると少し宛高まつて來る、民力が意外に現はれる、前に計畫した所が役に立たぬばかりでなく邪魔になつたりする、政府で計畫した

ことは大部分さうなつて居る、初めは民衆の方で乘氣にならぬいらぬものに思ふ、それで政府の方で規模を小さくして居るが後になつて民力の方が高まつて來て政府の計畫のやうな狭いものではいかぬ、もつと大きくしなくては、大きくしやうとしても政府で何うも大きくする事が出來ぬ、これが面倒の起る所以である。本年鐵道創設五十年記念會を催されましたが、鐵道が五十年の間に六千哩かゝつた、餘程の里程である、併し初め三咲六時でかける方が四咲八時で百哩かけるよりも百三十哩かけることが出来る、これでとう／＼六千哩押し通した、押し通して見ると今日の所では汽車が狭くてガタ／＼動いて仕方がない、物を運ぶにも同じ石炭高で運び方が少い、戦争があると云うて馬を横に駆べることは出來ぬ、隨分困つて居る。若し初め日本帝國の將來は斯うである、英國の植民地とは違ふ、軌道を廣くしてやれと云ふ所に見當をつけたならば最初事が難しくても後に大いに役に立つのである。其當時はこれで澤山であると云ふことにして居つて其儘にして居るが爲めに、民力の次第に高まつて來た時之れに應ずることが出來ず其儘で、其儘で年數

が經る程難しくなつて來る、一切の事がさうなつて居る、市區改正もさうなつて居る、教育も亦是れと同じく初め明治十九年大學令を出した時は全國に帝國大學と云ふものを一ヶ所にした、森文相は名文相と云はれた人であります、其名文相は折角大學令を作る時全國一ヶ所高等中學五ヶ所と云ふ風に決めた、其時はそれで澤山のやうに見えたのである。併し十年二十年経つて見ると何うとも仕様がない、仕やうがないけれども考へて見れば當り前の事である、全國に義務教育を課して居る、生れた者は誰でも教育を受けなければならぬと云ふことになつて居る、それも年數が決つて居る、中學も足らなくなる高等中學も足らなくなる、延いて大學も足らなくなると云ふことになるのですが、初め造る時は眞逆さうまで國力が進むとは思はぬ、何でも自分の手でなければ事が出來ぬと云ふやうに民衆を輕く見て居る、其民衆が何程の事が出來るかと思うて居ると年數の経つに従ひ意外に力を現して來る、何處の學校でも志望者が増えて來る、千人募れば一萬何千人と集つて來る、十分一及第して落第した者は何うして居るかと云ふ問題が起つて來てもま

だ政府の方では之れに應じて設備をしやうとせぬ、色んな調査會を設けて取調べると云ふ間に何年も經つて居る、終に近年急に學校を設けると云ふことになるとそこで昇格問題と云ふものが起つて來た、學校を造るはよいが造ると反対が起る、造らずに居つても反対が起る、文部大臣甚だ當惑して居る、之は全體に智識の進んで來た結果であります、若し私立でも官立と同等になると云ふ風になれば前と餘程變つた關係になるやうになる、前には私立でも官立同様になると云ふやうなことを夢にも考へなんだ、私立は或る教員の内職所さうして民間の不平連を養ふ所であると思はれた、隨分それでいちめられたのであります、國力の増進すると共に官立ではやり切れぬ、何でも學校がなくてはならぬ、初めは政府で建物さへ拵へれば何時でも學校が出來さうに思うて居たのであります、が後になつて見ると案外さういかぬ、私立學校でも相應に教員を養つて居る、色々な事もある、私立學校も必要であると云ふ事に目がついて來た、其中に私立學校も官立同様になり得ると云ふことになつて來た、初め私立では出來ぬと思つたことも出來ると認めね

ばならぬ、終に大學令の下、官公私との區別なく、相當の設備あるものは許すと云ふことになつたのであります、私立大學は幾つも帝國大學同様に大學に認められて居る、關西大學もさうなる譯である、さうなる日が遠くないと思はれます、が遠くないに決つて居りますけれども官立と同じになりさへすれば宜いかと云ふと大いなる疑問がある、一應は官立帝大と同等になると云ふ必要がある、一度同程度になつた時は文部省の定めた學制に據らずもう一層進まねばならぬ、帝國大學令と云ふものは隨分妙なものである、あゝ云ふもので最高教育と云ふことが云へるか何うか、實は高等教育問題は日本のみの問題でなく世界の問題である。今日の高等教育と云ふものは眞に高等教育の價値があるか、何年か定つた期間をあの建物の中に費せばそれで高等教育を受けたと云ふことになる、何年かあの建物に這入つて居つて何う云ふ利益を得て來るか、何か頭へ入れて來る、色々なことを記憶して來る其記憶して居る事が何になるか、記憶して居るならばまだ宜い、試験が済めば大抵忘れる試験が済んでも覺えて居る、卒業するまで覚えて居りま

すが、卒業して一年たつと何うであるか、五六六年たつて前の學科の話をされると一向分らぬ、普通學では平方立方と云ふ所も忘れてしまふ、それ以上の込入つた事は薩張り分らない、それも必ず記憶せねばならぬと云ふことならば仕方ありませぬが何う云ふ場合に必要か、外に新に記憶すべき事が澤山にある、次から次と國內の問題世界の問題と色々それを覚えるのに何うして前の事を覚える事が出来るか、大抵の古い部分は頭から出してしまつて新しいものを入れなければならぬ、あの建物に何年かを費すと云ふのは中世紀頃の教育である、寺小屋の如くにしてそこで坊主が教へた頃のものゝ遣り方である、今やうに印刷物は自由である通信も自由である、電信電話様々の設備があると云ふ時矢張り中世紀の如くあの建物の中で人を容れて或る一定の年数を費すと云ふことは隨分錯誤である。此處で世界の教育に大いなる變化を及ぼさねばならぬのであります、これは何十年と云ふても出来るものでない、何百年もかかる、急に行かぬ、まだ今の處あの建物の中で或る年數を費さなければならぬ、まるで費さぬよりは費す方がよい、さう何でも物は

次から次と役に立つものでない、何う云ふ良い食物を食つても、それは悉く榮養分とはならぬ、或る物は津があつて、教育でもえり津がある、今の所では津が多過ぎる、關西大學は大阪の必要、或は關西地方の必要を認めて出来上り發達するものであるらしい、今日の所法律、經濟、商業と云ふことになつて居りますのは丁度大阪人の必要を満す爲めであるらしい、それは結構である、算盤に合はぬことをしては永續きせぬ、併し今の大阪人は豫想よりも進んで居る、人の頭の中の事は窺ふことは出來ませぬが運動するだけでも感心である、銀行會社員は運動なんかするものでない、前垂れ掛けて居た者が此頃は慥かに商人が紳士の模範を示す、銀行會社員が紳士の生活をする、以前の如き顔容貌と違ふ容貌を見ても随分よい、如何にも運動場で鍛へ上げたやうな顔つきの者もある、中にはさうでないのもあります、眞に頭と共に身體を養ふと云ふことを實行して居る、其身體を鍛練すると云ふことがやさしそうでナカ／＼難かしい、それを大阪では身體を鍛練する、銀行會社員の運動が旺んである、それ程身體を鍛練して居る、其頭には必ず精神が鍛練して

居りさうである、あれ程立派な身體には今の如く法律經濟商業と云ふ位で満足が出来るとは考へることは出来ませぬ、それも結構なものである、必要なものである、併し頭は此位のものではない、もう少し何とか頭らしく出来さうである、上から作つて呉れる、教育を是れ迄の官設の帝國大學と云ふやうなものは、他の地方でも出来る。外から頭を拵へて呉れゝば之れを大阪で外から拵へて呉れるのを頼まず自分で身體の力を伸ばすと共に精神の力を伸ばす、段々と伸ばして最上に達するやうに思はれる。それは何時かそうなるに決つて居つて捨てゝ置いても百年二百年すればなるのであります、さう長い間かかると云ふことは大阪人の面目でない、もう少し何とか出来てもよいのである、随分近頃住宅とか土地とか提供する人がある、それも好いことでありますが序に今一層殊更教育の方へ力を入れゝば何う云ふものでありますか、大阪は進んだと云うても唯今の私立大學が東京で三番以下になる、隨分下の方へ行くかも知らぬ、之れを東京の主な私立大學にする位の事はそう難しくない、今日決める事も出來さうにも思はれるが、そこはまだ明治維新から

五十餘年経ただけであつて餘り頭が進んで居らぬと云ふことになりませうが、併し算盤をはぢくにしましても、もう大抵思ひ切つても好さうなもの、政府で大阪に望んだ所のものは大阪で好まず其儘に捨てゝしまつて、或は大分後悔した人もあるやうであります、今程力が進んで来れば後悔しなくとも何時でも出来ると云ふ心得がありさうに思はれて、それが事實になる事が遠くない、直ぐ出来さうに思はれるが何うでありますか？当事者は隨分御心配のやうであります、之れは大阪を見くびつての考へであつて真に大阪を理解すればチツトも御心配に及ばぬことゝ思ひますが、大阪の中に居る人の分の事であり、外から觀たものに分らぬ、外から觀たものは見當違ひをしても幾らか赦されることゝ存じます。若し見當違ひなことがありましたならば外から觀たので赦してやると云ふやうに願つて置きます。（速記）

付記 以上の二種類とも原文のままを原則としたが、明らかな誤記、誤植は正し、適宜句読点を補った。本文中に差別用語と見なされるものがあるが、言換え、削除等は施さず、これも原文のままとした。